

田中良太著

ワープロが社会を変える



中公新書

1040



中公新書 2040

江苏工业学院图书馆
藏书章

田中良太著
ワープロが社会を変える

中央公論社刊

田中良太（たなか・りょうた）

1942年（昭和17年）、北海道に生れる。

1965年、東京大学文学部卒。毎日新聞入社。

奈良支局、社会部（大阪）、京都支局、特別報道部、政治部を経て、現在、編集委員。

著書『共通一次と入試歴社会』

訳書『21世紀の教育よ こんにちは』（ジョン・ホルト著）

ワープロが社会を変える

中公新書 1040

©1991年

検印廃止

1991年 9月25日初版

1991年10月25日再版

著 者 田 中 良 太

発行者 嶋 中 鵬 二

本文印刷 三晃印刷

カバー印刷 大熊整美堂

製 本 小泉製本

発行所 中央公論社

〒104 東京都中央区京橋 2-8-7

振替東京2-34

Printed in Japan

ISBN4-12-101040-X

目次

第一章	新聞社からペンが消える	2
第二章	日本語への挑戦	28
第三章	変わる企業社会	58
第四章	電子文字の文化	86
第五章	ワープロの文章	119
第六章	管理と対話	144
第七章	障害者のコミュニケーション	171

ワープロが社会を変える

第一章 新聞社からペンが消える

消えたシンボル

一九九〇年六月一四日付けの『朝日新聞』に「ロッカク」という見出しの記事が掲載された。「社会部25時」というコラムなのだが、まずはお読みいただこう。

社会部から、通称「ロッカク」が消えた。

朝日新聞社独特の六角形の大きな机。昔は八角形だったらしい。その一角にデスク（次長）がどつかと腰を下ろし、ひっきりなしにかかって来る電話や、次から次へと出される原稿をさばいて、その日の夕刊や翌日の社会面を作り上げていく。大事件ともなれば記者が円陣を組むように取り囲み、司令塔のようになる。ロッカクは、新聞社の中でも一番新聞社ら

しい場所だな、と思っていた。

そのロッカクが最近、Y字形の白いオフィス机に変わった。編集局内で進められているワープロ導入に合わせて、より広い、機能性を重視したものに模様替えしたのである。

政治部など他の部では、「六角形」にこだわって机を変えなかった所もある。長年慣れ親しんでいただけに、さみしい気がしないでもない。

でも、いすを安定性のある五脚のものに替えたり、ワープロをたたきやすいように机の高さを五センチ低くしたりと、新聞社もやっと「オフィスの快適性」を工夫をするようになったのだ。駆け出しのころは「どんな所でも原稿を書けなきゃ、一人前じゃないぞ」と教えられたものだけだ。

そばを論説委員などの大先輩が通るたび、「机は新しくなったけど、原稿も新しい切り口のものが出るのかな？」と、皮肉っぽく笑って行く。もちろんですよ、と口まで出なかった言葉を飲み込む。そううまくいけば、苦労はないですね。

(石)

「とうとうここまで来たか」と思ったものである。記事の中でも多少うかがえるが、『朝日』の記者にとって、「ロッカク」は、取材・出稿部門の中核を意味する。ロッカクで働いているということは、華々しく活躍していることを意味するのだ。そのロッカクが社会部から消える。そん

な大変革をもたらしたのは、端的に言えばワープロだろう。

記者ワープロ導入

朝日新聞社では、八九年五月一日「ワープロ化推進本部」が設置された。本部長には、名古屋本社の編集局次長があてられたことが人事異動記事でわかる。同年一月五日付け朝刊のコラム「読者と新聞 編集局から」では、「ワープロ出稿」移行計画の内容を読者に明らかにしている。

ワープロ出稿とは何か。「取材先にいる記者がワープロで原稿を打ち、それを通信回線を使って編集局の担当デスクのワープロに送り込む。デスクがその原稿をチェック、必要な手直しをして『完全原稿』に仕立て、本社のホストコンピュータに送り込むと記事はできあがり」というシステムだと説明されている。さらにコラムでは、三年後の九二年秋に「原則ワープロ出稿」の態勢をつくり上げることを目標としていることが明らかにされている。八九年十一月の時点では、『朝日』の原稿のうちワープロで出稿されているのは四五%強。「みんな納得、無理ない移行」を基本方針に、態勢整備を進めているというのが、コラムの主旨だ。

九二年秋全面移行

「原則として」ではあるが、九二年秋、朝日新聞から手書き原稿が追放される。新聞社の編集局

から、原稿用紙と鉛筆・ペンが消えるのである。それに替わってワープロがならば、記者たちは、欧米の記者がタイプライターを叩くように、そろってワープロを打つ。これはおそらく、「ワープロ普及史」の中でも画期的なことであろう。

私が勤務している毎日新聞でも、ワープロ入力への移行は、真剣に取り組まれている。八九年夏以降、記者がワープロで打った記事は、通信回線で入力できるようにした。ワープロ入力される記事の比率はどんどん高まっている。

私自身の仕事は九〇年四月から、朝刊の「記者の目」「時代の目」の欄を作るデスクワークとなったが、記者がワープロで書いた原稿は、紙に印刷したものではなく、フロッピーディスクで受け取ったり、さらには通信回線で送らせたりしている。社外の人に執筆してもらう原稿も、可能ならばパソコン通信で送ってもらう。それらの原稿を手直ししたりするデスクワークは、パソコンのディスプレイを見ながら行い、それを終えてから通信回線で入力する。「ワープロ・デスクワーク」である。

こうすれば、原稿はそのまま印刷できる「文字列」となる。以前の印刷工程でいえば、活字を拾い終えたと同様の状態になる。その意味ではきわめて便利である。

しかし組織というのは難しいもので、ワープロ入力によって仕事を失う職場がある。それだけでなく、関連した諸問題について、労働組合の了承を取り付けなければならない。

さらにいえば、実際にワープロを使って記事を入力するのは、多数の新聞記者たちである。もちろん記者も組織の一員であるが、「組織に埋没せずに、自分の目で真実を見つめ、自分にしか書けない記事を書け」などと教育される存在でもある。だからというわけでもないが、「ワープロなんか絶対使わない」といいはるツワモノ中にはいる。

そういう難問を一つ一つ解決しながら、ほとんどの新聞社がいま、ワープロ入力への移行に取り組んでいるのである。

さて新聞社の社会部というのは、非常に忙しい職場である。原稿を書きながら、電話が鳴るとすぐ取らなければならない。ちょっとした事件でもあれば、目まぐるしい「締切り時刻との競走」となる。

しかし、ワープロを打つ場合、手書きのとき使っていた机、イスでは、やや机が高すぎる（これからワープロを使い始めようという人のためにいうと、机の高さを正しく設定することは、きわめて重要なことだ。とくにデスクトップ型のワープロ、パソコンなら、ディスプレイをやや見下ろすという格好にしなければならない。通常の机を使い、ディスプレイを見上げるような姿勢でワープロを使うと、耐えられないような肩こりに襲われる）。『朝日』の社会部でも、当初は、机、イスを順次入れ替えて、ワープロを打つのに適した席を作ったのではなからうか。

これまでロツカクで原稿を書いていた記者たちが、「ワープロ席」で入力することになる。そ

うなると、「中枢」であるはずのロッキンに寄りつく記者の数が減ってくる。全員がワープロ入力となると、ロッキンに座っているのはデスクだけだ。それでは仕事に支障が出る。

ワープロ入力に移行しても、一般の記者がデスクの周辺で仕事するようにするためには、ロッキンそのものを廃棄し、オフィス机を入れるしかない。それが『朝日』社会部の選択だったのであろう。

記者が文字入力する

さて、新聞社が手書き原稿からワープロ入力に移行することによるメリットは何だろうか。もっともわかりやすいのが、「合理化」であろう。

私が毎日新聞社に入社したのは一九六五年だったが、当時の記事入力、伝送のシステムは「漢テレ」（漢字テレタイプ）によるものだった。単純にいえば、私たち支局の記者が、記事を書き、デスクがそれを手直しする。支局のオペレータが漢テレで、そのとおりに打つと、漢テレは、さん（鑽）孔テープを吐き出す。そのさん孔テープを電話線を通じて本社に送る。本社では、「コピー」のさん孔テープをモノタイプ（自動活字鑄造機）にかけ、活字にするという手順だった。

幅二センチほどのテープにあけられた小さな穴の並び具合が、個々の活字に対応していたのだ。私は奈良支局にいたのだが、そこからは大阪本社にテープを伝送する。必要であれば、大阪本社

からさらに東京、西部など他本社にも送る。それ以前は、全く同じ記事でも、東京、大阪などの各本社（発行所）ごとに入力（文選・植字）していた。漢テレシステムは、入力を一回だけにするというメリットがあったのだ。

ワープロ入力への移行にともない、この一回の入力も不要になる。すでに新聞づくりの工程は、鉛の活字をなくしたCTS（電算写植システム）となっている。ワープロで打った文章をコンピュータに入力すると、そのまま写植用の文字列となって出てくることになる。つまり、以前は文選・植字の工員がやり、パンチャーがやっていた「入力」の工程を、新聞記者がやることになる。それだけではない。漢テレの時代には、記事を書けばすぐオペレータが打ってくれるケースばかりではなかった。新聞記者の多くは、官庁、警察、団体などの記者クラブで仕事をする。急がない原稿の場合、オートバイなどで原稿を取りに回る「原稿便」に託したが、それではまにあわない場合、電話で吹き込んだ。電話で原稿を取るのは、本社にいる遊軍記者か、連絡の速記者だった。

海外支局でも同じで、急がない場合はテレックスで送った（これはローマ字しか使えない。テレックスから元の原稿である漢字かな混じり文に戻す作業が大変だった）。しかし急ぎのニュースの場合、電話で送稿した。記者クラブや海外支局の記者が書いた原稿を、遊軍の記者や速記者が電話を受けてそのまま書く。これほどのムダもあるまい。海外支局の場合、国際電話料もバカにならない

金額だった。

その後ファクシミリができて、多少は便利になった。記者クラブからも、海外支局からも、原稿はファクシミリ送りが原則となり、原稿便や、テレックスはほとんど使われなくなった。

しかし、ワープロ入力の場合、ファクシミリとは比較にならない。電話線一本でコンピュータと直結するから、記者クラブも、海外支局も、社内と全く同じ条件となる。伝送に要する時間も、普通の新聞原稿なら瞬時である。スピーディーな原稿処理が可能になるという意味でも、「合理化」のメリットは大きい。

機械化される校閲

新聞記事の正確度という面からみても、ワープロ入力はメリットがある。記者の書いた記事を手打ちパンチャーが打ち直す場合、ミスパンチは避けられない。ワープロ入力では、記者の書いたものをそのまま入力するのだから、ミスパンチはあり得ないのである。

「校閲」という作業は、「原稿どおりに文字入力されているか」をチェックする「校正」と、「原稿にミスはないか」をチェックする（狭義の）校閲」という二つがあるとされる。ワープロ入力の下では、校正の作業は不要になり、狭義の校閲に全力を注ぐことができる。

その校閲の作業も機械化される。たとえば、固有名詞のチェックである。東京都千代田区霞が

関の場合、地名は「霞が関」だが、地下鉄の駅名は「霞ヶ関」、有名なビルも「霞ヶ関ビル」である。隣の港区虎ノ門は、地名も駅名も「虎ノ門」だが、「虎の門病院」となる。「校閲機」にこういうことを記憶させ、「東京都千代田区霞ヶ関」「霞が関ビル」などの文字列があると、「ミスではないか」と傍線を引くようにすればいい。都道府県名と市名を組み合わせておけば、「大阪府尼崎市」「山口県小郡市」などのミスは防止できる。

人名の場合も同じである。「ワタナベミチオ」氏は多数いるだろうが、新聞に登場する頻度抜群なのは、自民党渡辺派を率いる渡辺美智雄氏だろう。渡部美智雄、渡辺美智男、渡辺美智夫などが出てきた場合は、傍線を引くようにする。人名と役職の組み合わせの問題もある。海部内閣発足と同時に、「宇野前首相」「竹下元首相」という呼称になったが、そのむねソフトを組み替えておけば、短命だった宇野内閣を忘れて、つい「竹下前首相」とやってしまう誤りを防ぐこともできる。

ことわざの字句、意味が正しいか否か、歴史的事実の年号、最近の出来事の月日等もチェック対象に加えることも可能だ。「そんな初歩的なこと」と、読者諸兄の笑いを誘うかもしれないが、こういうミスに神経を使わざるをえないのが、新聞の宿命である。「時間との闘い」で、大急ぎで作られる原稿が多いことが最大の理由だが、取材対象のミスということもある。政治家らが事実関係や、ことわざの引用で誤った発言をし、そのまま原稿になってしまいうケースもまれではな

い。

こうした校閲機は、将来はかなり多機能のものとなるという予測もできる。ワープロメーカーは八〇年代後半、「悪文チェック機能付き」「推敲支援機能付き」などとうたったオフィスワープロを売りだしたが、それが多機能校閲機の母胎となる。

「悪文チェック」「推敲支援」などの機能では、次のような点をチェックできる。

- (1) 同音異義語の使い方が適切であるか否か。
 - (2) 代名詞が何を指すかが明確であるか。
 - (3) 接続詞の使い方が適切であるか。
 - (4) 一センテンスが長すぎないか。
 - (5) 改行までのセンテンス群が長すぎないか。
 - (6) 漢字が多すぎる文章でないか。
 - (7) あいまいな、あるいは情緒的な語句が使われていないか。
- こうしたチェックポイントを盛り込んだ多機能校閲機ができた場合、それは「デスクワーク・サポート機」と呼べるものにもなっている。デスクは、校閲機を利用しながら、原稿処理の作業をする。それが第一次の校閲作業であり、デスクが処理した後の原稿をチェックするのが二次（最終）校閲となる。

変わる原稿の流れ

ワープロ入力に全面移行した場合、「原稿」の流れはどう変化するかを、図1に示した。これはあくまでモデルであり、個々の新聞社の構想ではない。原稿はすべて本社が受けるものとし、国内支局の場合は省略、また他本社との原稿のやりとりなども無視した。手書きの場合の速記者さん孔オペレータなどがなくなっていること、校閲の位置付けの違いなどわかっていただけるだろう。

ワープロ入力への移行は「合理化」メリットだけでなく、ミスの少ない、新聞記事として整った文章で構成された紙面ができるメリットがあるということになる。

これで新聞記事の「管理」が一層進むという危惧を持たれる方も多いだろう。それがあたっているのは確かだ。ミスのチェックはともかく、用語、文体などのチェックは、記事内容の管理に結び付きかねない。

その管理を自制していくのか、それともコンピュータ化で可能になった「管理」を堂々と強化していくのか、個々の新聞社の政策的選択の問題であろう。ワープロ入力への移行によって、この問題はシビアさを増す。

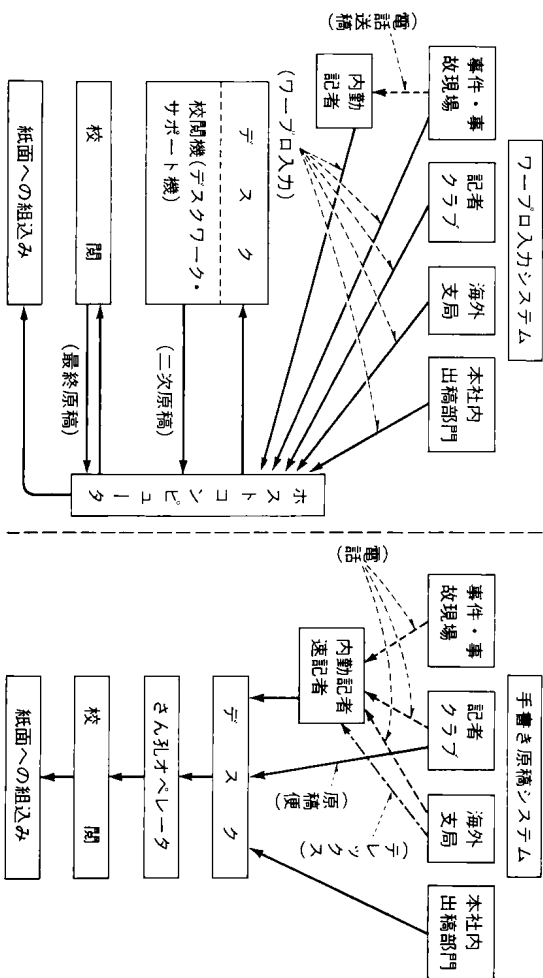


図1 手書きからワープロ入力への移行による原稿の流れの変化